限界社畜ＯＬですがデートだけしていた女風のＮｏ．１セラピストに
利用をやめると言ったら性感マッサージどころか
中出し孕ませえっちをされて徹底的に堕とされました

「……っ、ぁっ♡あっ♡…まっ♡……そうさんっ♡」

（普通のマッサージだけって……っ！こんなの、聞いてないのにっ……♡）

薄暗いラブホテルの一室に、甘い水音と掠れた声が木霊する。

キングサイズのベッドの上、真子は両手と両足に枷をつけられて動きを完全に封じられていた。強すぎる快楽で腰が跳ねるたび、鎖が悲鳴みたいな音を立てる。逃げ場なんて、もうどこにもなかった。

あるいは初めからそんなものはなかったのかもしれない。女性用風俗人気ＮＯ．１セラピスト「奏」。女性に快楽を与えるプロに騙されてホテルの部屋に入ったその瞬間から。

うつ伏せで肩をほぐされていた時間は、いつの間にか過去のものになっていた。真子は仰向けにひっくり返されてバスローブを剥ぎ取られ、オイルで濡れた指で胸を弄ばれている。

ぬるっ♡ するっ♡ ふにっ♡ ふにふに…♡

「そう、さんっ…♡ やだっ♡ その、触り方…♡」

的確に気持ちよさを与えてくる触れ方に、ぶるりと身体が震えて、真子の意思に反して声が甘くなる。

固く凝った乳首にオイルを垂らされてくりくりっ♡ とされると、また抑えきれない声が出た。

「…ひゃぁぁん♡…っゃ、　ゃっ♡…それっ♡あっ…♡あんん〜〜っ♡♡」

「嫌がっても無駄だよ。俺が本気で真子ちゃんのことを好きなんだってわかるまでやめてあげない…」

奏の声は甘いのに、蜂蜜みたいな色をしたその目は冷静に真子の身体の反応をよく見ていた。

「一年間、ずっと我慢してたんだよ。こうして真子ちゃんを独り占めして、俺好みに染め上げることばっかり考えてた…」

耳元で囁かれる甘く低い声に、真子の心臓がドキッと跳ねた。

「…っんぅ♡…ふぁぁん♡…なん、で……？奏さんなら私なんかより素敵な女性が、いくらでも……！」

「真子ちゃんじゃなきゃ意味がないの。……ほら、そんなに可愛い顔で泣きそうな目をしないで。」

熱を孕んだ瞳で見つめられ、愛おしそうに頬を撫でられる。

（流されちゃだめ…♡奏さんはセラピストなんだから……きっとこれも営業で…他の人にもこういうことを言ってるに決まってるんだから…！）

「……まだ余計なこと考えてるの？真子ちゃんは普通の恋愛をして彼氏が欲しいんだよね…？でも、もう俺以外の男じゃ、満足できないと思うよ…」

ーーーくちゅっ♡

奏の指先が、すっかり濡れ切ったクリトリスを容赦なく捉えた。

「…ひ　ぁっ♡…ぁ　ぅ…♡♡…んあぁ〜〜〜〜〜っっ♡♡」

弱い触り方を見抜かれて、ずっとその動きを繰り返されて、処理し切れない快楽を与え続けられる。

真子は美しく危険な目の前の男の手のひらの上で、嬌声を上げることしかできなかった。

◇◆◇◆

「じゃあ、あとはよろしく！お疲れー。」

課長は机の上に残っていた書類を真子のデスクへ置くと、足早にオフィスを出て行った。

「ごめん、今日子どものお迎えがあって…水野さん、これだけお願いしてもいい？」

「うん、大丈夫。」

同僚が申し訳なさそうに手を合わせ、そのまま慌ただしくオフィスを出ていく。

「お疲れさまでした。」

真子がそう返す頃には、入口のドアが閉まっていた。先ほどまで聞こえていた話し声も、キーボードの音も止まって急に静かになる。

真子の机には、さっき渡された書類と、今日中に終わらせたい仕事がまだいくつも残っている。

「……今日も残業か。」

小さく呟いて、真子は机の上のスマートフォンへ手を伸ばした。画面をつけて、カレンダーを開くと、日曜日に「奏さん」とだけ入っている。

真子の口元が自然と緩む。

「……あと三日。」

（…うん、奏さんに会えるなら頑張れる。）

スマートフォンを伏せると、真子は再びパソコンに向き直った。

◇◆◇◆

日曜日の午後。

待ち合わせ場所の駅前の広場に着く少し前から、真子には奏の姿が見えていた。

黒いシャツに黒いパンツ。足元まで黒で揃えた奏は、人の多い場所に立っていても妙に目立つ。背が高いから、というだけではない。姿勢が綺麗で、立つ

ているだけで絵になるのだ。

柔らかく流した黒髪。すっきりした輪郭。伏せた目元まで整っていて、スマートフォンを眺めている横顔だけで雑誌の撮影みたいだった。

案の定、周囲の女性たちがちらちらと奏を見ている。真子も初めて会ったときはそうだった。写真で十分格好いいと思っていたのに、実物はそれ以上だった。

「奏さん。」

声をかけると、奏が顔を上げた。真子を見つけた瞬間、表情がふわりと柔らかくなる。

「…真子ちゃん。」

「お待たせしました。」

「全然。俺も今来たところだから。」

奏は女性用風俗の人気ＮＯ．１セラピストだ。

女性用風俗とは、セラピストが女性向けに本番なしの性的なマッサージをしてくれるサービスで、真子は漫画でその存在を知り、利用を始めた。とはいえ、いきなり初めて会う人に性感マッサージを受けることには抵抗がある。だから初めて利用した時、人気ＮＯ．１の人なら間違い無いだろうと考えて奏を指名し、デートをお願いした。

結局、それ以降、デートだけでも楽しくて、性感マッサージはなしで、デート利用を続けている。

（奏さん、少し髪切った？…今日も相変わらずかっこいいな。）

そんなことを考えていると、周囲からまた視線を感じた。さっき奏を見ていた女性たちだ。一瞬、奏を見て、次に真子を見る。

（…多分、釣り合わないなって思われているんだろうな。）

真子は決して可愛いと言われるタイプではない。目が大きいわけでも顔立ちがはっきりしているわけでもなく、どちらかというと、地味で目立たないタイプだ。

「真子ちゃん、行こっか。この前行きたいって言ってたパンケーキの店、予約してるから。」

「え？予約してくれたんですか？」

「うん。日曜日のこの時間は混むらしいから。」

「ありがとうございます！」

奏は自然に真子の歩幅に合わせて歩いてくれる。

目的の店に着くと、奏が扉を開けてくれた。店内は明るく、窓際の席には午後の日差しが差し込んでいる。

真子と奏は二人で向かい合って座り、パンケーキを注文した。

料理が届くのを待つ間に、真子は他愛もない話をする。会社の近くで犬を見かけて可愛かったとか、新しくできたカフェのコーヒーが美味しかったとか、本当にどうでもいいような話だ。

奏は頬杖をつきながら真子が話している姿を柔らかい表情で見ていた。

「真子ちゃんって、ほんとそういう話ばっかりするね。日常でちょっと楽しかったこと。」

「あ、ごめんなさいっ。嫌ですよね？つまらない話ばっかりで…」

「ううん、逆だよ。そういうところ、ほんと好き。」

あまりにもさらりと言われて、真子は瞬きをした。少し遅れて顔が赤くなる。

「……ありがとう、ございます…」

奏はいつもデート中に可愛いとか、そう言うところ素敵だよねとか、たくさ

ん褒めてくれる。真子は何度褒められても慣れなくて、毎回どうしようもなく照れてしまう。

「仕事は？最近も忙しいの？」

「えっと、いつも通りです。でももうすぐ決算の時期だから、来週からはもっと忙しくなるかも…」

「そっか…こうやって定期的に会ってくれるのは嬉しいけど、お金大変でしょ？前から言ってるけど、俺、真子ちゃんならプラベしてもいいのに。」

プラベとはお店を通さずにプライベートで会うことだ。真子は激しく首を振る。

「そんなことしてバレたら退店になっちゃいますよ。奏さんがいなくなったらたくさんの女性たちが悲しんでしまいますから。」

「…真子ちゃんも？」

もちろんと答えると、奏はそっか、と嬉しそうに微笑んだ。

あっという間に時間が経ち、お別れになる。

家に帰って今日食べたパンケーキの写真を眺めていると、画面の上にメッセージの通知が表示された。真子の妹からだった。

『お姉ちゃん！今日すんごいイケメンと歩いてるの見たよ！』

『彼氏できたんだね！今度会わせてよ！』

「……えっ？」

真子の口から思わず小さく声が漏れた。

（奏さんと歩いてるところ、見られてたんだ。なんて返そう…）

本当のことは言えないし、かといって彼氏だと思われるのも困る。

『彼氏じゃないよ。ただの知り合いの人。』

悩んだ末に、真子が当たり障りのない内容のメッセージを送るとすぐに返信があった。

『えー絶対怪しい！あんなイケメンとどこで知り合ったの？お姉ちゃん、やるじゃん！今度詳しく聞かせて！』

（やるじゃんって……聞かれても答えられないし、適当にはぐらかそう。）

真子は苦笑しながら妹との会話画面を閉じた。

友達リストの画面に切り替わると、昔の同級生のアイコンが目に入る。いつの間にか苗字が変わっていたり、アイコンが以前は本人の写真だったのに、今は幼い子どもの写真に変わっていたりする。

（もう私も２６歳か…みんなどんどん結婚して、中には子どもを産んでいる人もいる。いつまでもこんなこと続けていたらダメだよね。）

奏と会うのは楽しいし、週末に予定が入っているだけで、残業続きの毎日でも頑張れる。

それでも、奏は仕事だから真子と会ってくれているだけのセラピストだ。このままずるずると利用を続けていたら、現実の恋愛からどんどん遠ざかる気がした。

（いい加減、ちゃんといい人探さないとな…奏さんと次の予約の話はした。もう、次で最後にしよう。）

胸の奥がズキリと痛んだけれど、気がつかないふりをした。

◇◆◇◆

二週間後、週末の夜。
真子は奏と一緒にディナーに出かけた。最後だからと思って少しだけいいレストランを選んだ。
デートはいつも通り楽しかったが、今日で利用を最後にするという話はできないまま、店を出る時間になってしまった。

駅へ向かう途中、真子は思い切って切り出した。

「…奏さん。」

「ん？」

「私今日で利用するの、最後にします。一年くらい利用してきたし、そろそろ

ちゃんと普通に恋愛したほうがいいのかなって思って…」

真子がそう言うと、ほんの一瞬、奏の足が止まった。

「そっか…もう決めたの？」

「はい。今まで本当にありがとうございました。」

真子が頭を下げると、奏は少しだけ困ったように笑った。

「そっか、真子ちゃんの気持ちはわかったよ。」

街灯の下で見る奏の横顔は、いつもと変わらないように見えた。けれど、さっきまで柔らかく笑っていた目元が、少し冷えたような気がした。

「…ねぇ、真子ちゃん。今日、相当疲れてるでしょ？ご飯食べてる間、何回も肩回してた。」

「え？」

確かに肩は凝っている。ここ二週間は特に忙しくて、パソコンで毎日長時間作業をしていたからだ。

「最後に普通のマッサージ、受けてみない？」

「でも、もう予約時間が……」

スマホを開いて時間を確認すると、もう予約の終了時刻が迫っていた。

「いいよ、お店には延長の報告しないから。一年利用してくれたお礼だと思って。…ね？」

（…奏さんともう少し一緒にいたい気持ちはある。身体が辛いのは事実だし、最後くらいお言葉に甘えてみてもいいのかな？）

相手は人気ＮＯ．１セラピストだ。長く利用した相手なら、他の客にもきっと同じようなことをしているのだろう。

「じゃあ、せっかくなのでお願いしてもいいですか？」

「うん、近くのホテルに行こう。」

奏は安心したように微笑むと真子の手を取って歩き出した。

奏に連れてこられたのは近くのラブホテルの一室だった。何度もデートはしてきたけれど、密室で二人きりというのは初めてのことで緊張する。

オイルを使うからと言われて、一応シャワーは浴びた。真子の次に奏もシャワーを浴びて、ローブを着て出てきた。

照明が落とされた薄暗い部屋の中、奏が部屋の中央に置かれたキングサイズのベッドを指差す。

「真子ちゃん、そこに横になって。…そう、うつ伏せでね。」

真子は言われたとおりにベッドの上に寝転んだ。普通のマッサージだけ、そう分かっているのに、奏が近づいてくる気配だけで心臓の鼓動が速くなる。

「ちょっとローブをずらすよ。…オイル、温かいから、びっくりしないでね。」

奏の声と同時に、真子の肩にじんわりと心地よい熱が広がる。ラベンダーの香りがするホットオイルが肩に広げられて、ガチガチに固まった肩の筋肉が、大きな円を描くようにして指で解されていく。

「んっ……」

（すごく気持ちがいい。奏さんの手、大きくて温かくて安心する。）

「やっぱりすごい肩こってるね。こんなになるまで頑張ってたんだ…」

「最近は特に忙しくて…」

返事をしながら、真子はうとうとと眠くなり始めていた。落ちそうになる瞼を何度も持ち上げる。

「……ねぇ、真子ちゃん。今日で最後にするって本気なんだよね…？」

奏が真子の肩を解す手を止めないまま尋ねてくる。

「はい、もう決めたことですから…」

（やっぱり、お客さんが減るから嫌なのかな？奏さんならすぐに他の人で予約が埋まりそうだけど…）

何度も確認されて、真子は不思議に思う。真子は奏から見れば客の一人で、しかもデート利用しかしないからマッサージを受ける客に比べれば価格も安いはずだ。

「ねぇ、もし俺が本気だったら？…俺が本気で真子ちゃんのこと好きだったら、どうなる？」

「……えっ？」

予想外の奏の言葉に一気に眠気が覚める。

真子は振り返って奏の顔を見た。奏は真っ直ぐに真子を見ていて、冗談を言っているようには見えなかった。

（え？奏さん、本気で私のこと…？いや、待って。奏さんはセラピストで、

こんなにカッコよくてすごくモテる人。そんなはずは…）

いくら嘘をついているようには見えなくても奏は人気セラピストだ。営業で言っている可能性だってゼロではない。

「……困ります。」

もっと上手い返し方があったのかもしれないがそれだけ答えるのが精一杯だった。真子はひどく動揺していた。

「……俺のこと、信じられない？」

「…っ！」

考えていることを当てられて真子は言葉に詰まった。
奏のことが嫌なわけではない。むしろ営業だと心の中で割り切らなければ何度も好きになってしまいそうなほど魅力的な男性だと思っている。
もしも奏と普通の生活の中で出会って、本気で好きだと言われれば二つ返事で付き合うことを承諾しただろう。

「…だって奏さんはセラピストさんじゃないですか…」

自分でもずるいと思う。そう言われてしまえは奏は何も返せないだろう。

「…うん。真子ちゃんならそう言うと思った。」

奏は真子の言葉に頷いた。でも少しも納得してくれた感じはしなかった。

「客とセラピストって関係ならその先に進むことはないもんね。…でも俺がどれだけ我慢してセラピストを演じていたか、真子ちゃんは知らないでしょ？」

奏はそう言うと手を止めて、ふぅ、と息を吐いた。

「言葉で言ってもわかってもらえないなら仕方ないよね。俺が一番得意なことでわからせるよ…」

「奏さん…？」

奏の手が、肩から下に降りていき、そのまま、胸の膨らみの下へと滑り込む。触れているか触れていないか。奏の指は亀が進むようにゆっくりと動く。

「……っ！…ぁっ♡　…ふぁ♡…奏さん、これ性感じゃ…？普通のマッサー

ジだけって…」

「…ん？　俺、性感マッサージをしないなんて一言も言ってないよ。」

身を捩ろうとしたが、背中の上に乗られていて強く押さえつけられている感じはしないのに少しも動けない。

奏の指が動くたび、ゾワゾワっと甘い刺激が背筋に走る。真子はただ枕に顔を押し付けて漏れ出しそうになる声を抑えた。

「…っ♡　…　んんっ♡　……ふっ♡　……ぅぅっ～～～♡」

声を抑えても息遣いはどうしても荒くなってしまう。上からふっと笑いを含んだ息を吐く音が聞こえた。

「…感じてるの、隠さなくていいよ。分かるから。」

奏は真子の上に覆い被さるように身体を密着させると、耳にちゅっ♡と音を立ててキスを落とした。

「ひゃっ♡…まって♡…んっ♡そうさんっ♡」

くちゅくちゅ♡ちゅく♡ちゅぱっ♡ちゅる♡

「…あっ♡…あん♡…っ～♡みみ、なめちゃっ♡ひっ♡あぁっ～～～♡」

耳の中でダイレクトに水音が響いて自分の声すら聞こえなくなる。状況も飲み込めていないのに身体だけが奏の技術で昂らされていく。

ちゅむ♡ ちゅくちゅく♡ ちゅぱっ♡ ちゅぱっ♡

耳の奥まで舐められて、真子は肩を震わせた。ぞくっ♡ ぞくぞくっ♡ と脳が痺れるような快感が走って枕に押し付けた両手をぎゅっと握り締めた。

耳への刺激に翻弄されている間に、奏の大きな手がすぅ〜っ♡ 下に降りていく。

腰のラインに合わせて脇腹をねっとりとなぞり、そのまま太ももの裏まで辿りつく。そのままむぎゅ♡ むぎゅっ♡ とお尻を揉まれた。

「〜〜っっ♡…あっ♡ そんなところっ……♡ あぐっ♡ 〜〜ぅぅっ♡」

逃げなきゃと思うのに身体はもう全然いうことを聞かなかった。力が抜けて

真っ赤になりながら真子はベッドに身体を沈める。

「真子ちゃん、可愛いね。まだ逃げられると思ってるんだ。俺たちは女性に快楽を与えるプロだから、仕事場まで連れ込めば、女の子一人逃さないなんて簡単なんだよ。」

女風セラピストの奏にとってホテルはホームグラウンドみたいなものだ。そんなところに警戒心も持たずについてきてはダメだったんだと今更理解した。けれど、もうとっくに手遅れだった。

「…だから諦めて気持ちよくなろうね？」

軽く顎を持ち上げられて、奏と視線が合う。だらしない顔を見られたくないのに、自分を見つめる奏の瞳が熱を孕んでいて、目が離せない。

「なんで…？　奏さん、他のお客さんがいっぱいいるのに…私なんかに…」

「…真子ちゃんがいいって言ってるんだけど、わからない？　頑張り屋さんなところ、それでも文句ひとつ言わずに楽しいことばかりに目を向ける前向きなところ、自分が一番大変なのに周りの人ばっかり気にかけちゃう優しいところ…全部、すごく好き。」

（奏さん、本気で私のこと…？）

真剣な表情でそう返されても、真子はどうしていいか分からず瞬きを繰り返した。奏が自分のことをそんな風に思ってくれていたなんて想像もしていなかった。こうして言葉で言われてもやっぱり信じられない。

（結婚まで見据えた本気の恋愛をしようって決めたんだ。私なんかが奏さんと付き合ったとしても、きっとすぐに愛想を尽かされてしまう…）

真子は何も言わなかったが、奏には真子が考えていることが伝わってしまったようだ。

「…言葉を重ねても信じられないか。セラピストを続けていたのも、真子ちゃんがプライベートでは絶対に会ってくれなかったからなんだけど…まぁいいや、時間をかけて教えてあげるから。」

奏は優しく真子の腰に手を添えた。

「仰向けになろうか…」

腰に添えられた手にぐっと力を入れられて、身体を回転させられる。

「…っ！　奏さん、待って…！」

身体の向きを変えられて、奏を見上げる形になる。起き上がろうとして奏の肩を押してみたけれどびくともしない。

奏は抵抗することすら可愛いというようにふっと口元を緩めると、真子の両手首を握った。

「…じっとしてね、真子ちゃん。」

奏はそう言いながら、ベッドの脇に置いてあるカバンから何かを取り出した。いつも奏はデートの時に大きなカバンを持っているけれど、その中に何が入っているか、真子は知らなかった。

「奏さん、それって…」

真子は奏がカバンから出したものを見て、息を呑んだ。奏が取り出したのは黒い革でできた手錠だった。

真子が驚く暇もなく、奏は慣れた手つきで真子の細い手首に手錠をかけていく。柔らかい素材で痛くはないけれど、確実に動きが制限される。そのまま両手を頭上に回されて、鎖をベッドのフレームに繋がれた。

「…こっちも。」

奏は後ろに下がると、真子の足首にも手を伸ばす。カチャカチャと無機質な音を立てながら奏は淡々と真子の足にも枷をつけていく。

「奏さん、なんでこんなもの、持って…？」

「なんでって、セラピストだから。急に拘束プレイを頼まれるなんて日常茶飯事だし。」

奏は足枷の装着を終えると、真子の腰の上に座って逃がさないようにした。

「さてと、ローブも脱ごっか。」

「お願い…！　まって…！　…あっ！」

スルスルと腰の紐を取られて、下着だけの姿にされてしまう。さらに、いつの間にかブラジャーのホックが外されていて、ブラジャーもずり上げられて胸を露わにされてしまう。

（嘘っ…？これっ、動けないし、服も脱がされて…これって、もう奏さんにされるがままの状態なんじゃ…？）

拘束されてブラジャーすらも脱がされて、罠にかかった小動物のように、真子は震えながら、胸を上下させる。

「これで逃げられないね、真子ちゃん…怖がらなくても大丈夫だよ。痛い系のプレイはしないし、気持ちよくなるだけだから…」

奏はそう言いながら、そっと両手で真子の胸に触れた。ぬるついた指で真子の双丘を包むようにつぅ〜〜っ♡と撫でる。

ぬるっ♡つぅ〜〜っ♡すり…♡すり…♡

「…んっ♡ …ふっ♡ 〜〜〜〜ぁっ♡ あぁぅっ♡」

（あっ♡ やばい♡ その触り方…♡ すごくぞわぞわするっ♡）

カシャンカシャン！と拘束具が虚しく音を立てる。触り方は優しいのに的確にゾクゾクとする感覚を与えてくる。

ふにっ♡ そろっ♡ ぬるっ♡ ぬるっ♡

「…っぁ♡ あぁ〜〜♡ そうさん、ぬるぬるして…ひぃん♡」

（んんッ♡ 恥ずかしいのに変な声がでちゃうっ♡ 奏さんの手、大きくてぬるぬるして…）

「真子ちゃんの声、可愛い。もっと聞きたくなる…」

ぬるっ♡ くるくる♡ くるくる♡

胸を包んでいた指が動かされて、乳首の周りを円を描くようになぞられる。触られてもいないのに、ぷくっ…♡ と期待するみたいに乳首が膨らんでしまう。

「…っ♡　ぁっ♡ そうさん、くるくる、やっ♡」

「くるくるされるの好き？ 真子ちゃんの乳首どんどん大きくなってきてるよ。」

ぬる〜っ♡ するする♡ ぬりゅ♡ ぬりゅ♡

「 ゙あっ♡ ちがうのにっ♡…ひぅ♡… ゙あぁっ〜〜♡」

（やだっ♡ 恥ずかしいのに、すごく気持ちがいい♡ 乳首ぷっくりして感じてるのバレちゃう♡）

「素直じゃないね。真子ちゃん。さっきから、腰をやらしくひくつかせてるくせに…」

腰をさらっと撫でられて、そんな動き一つでも感じさせられて、また腰がビクンッと跳ねる。

「コリコリ乳首触ってあげるね。」

硬くなっていることを教えるみたいに、きゅっと先端を摘まれる。

「ひぃんんっ♡…ふっ♡…あっ…♡ そうさん、そこ、だめですっ…♡」

「ダメじゃないでしょ？ オイル足すよ。」

とろぉ～♡と熱いオイルを乳首に垂らされて、その刺激だけでピンッ♡とまた乳首が立ってきてしまう。そのままコネ回すようにぬりゅぬりゅ♡とされた。

「〝あっ～～～♡ それ、だめっ♡ 〝んぅぅっ♡ 〝んぁ♡」

腰が浮き上がってビクンッビクンッと跳ねる。

ぬりゅぬりゅ♡ぴちゃ♡くにくに♡

「真子ちゃん、かなり敏感だね。もうイキそうになってるの？」

「…ひゃっ♡…うぅ～～っ♡だってぇ、ちくびダメなのにっ、そうさんがやめてくれないからぁ～～～～♡♡」

「そんな可愛い声で言われても、やめるどころかもっとしたくなるだけど……嫌ならちゃんと抵抗してごらん？」

両手も両足も拘束されていて真子にできることなんてない。それをわかっているくせに奏は意地悪く言ってくる。

ぬりゅぬりゅっ♡ コリコリ♡ コリコリ♡

「ひぅぅっ♡…やっ♡ コリコリしないでぇっ～～♡♡」

「コリコリは飽きちゃった？ じゃあ今度はカリカリってしてみようか？」

奏の綺麗に切り揃えられた爪の先で、カリカリ♡ カリカリと擦られる。

「あっ♡ カリカリもやっ♡ あっ♡ ゛ああ～～～♡ おんんっ♡ ゛あぁぁぅ～～～♡」

腰がヘコヘコ♡と動いて、あんまり気持ちが良くて、奏の指に胸を押しつけるみたいになってしまう。

「反応可愛すぎ…キスしたくなる。」

奏は熱っぽい声でそう呟くと、真子の顎に手をかけた。目を離せないように真子の顔を固定したまま、すぐにはキスをせずにじっと真子の顔を見つめる。

（あっ♡ やばいっ…♡ 奏さんの顔が近い♡）

真子は逃げることも忘れてトロンとした目で奏の顔を見つめ返す。

溢れそうな長いまつ毛、形のいい唇。奏の石鹸みたいな香水の匂いがふわっとして、ドキドキと心臓の鼓動が速くなる。

「真子ちゃん、今自分がどんな顔してるかわかってる？ 口半開きで目を潤ませて…キスを待ってるようにしか見えない顔してるよ。」

「…そんなことなっ！……んんっ♡」

反抗の言葉を最後まで言わせてもらうこともできないまま唇を奪われた。熱く濡れた柔らかい感触がする。

そのままちゅっ♡ ちゅっ♡ と啄むように軽いキスを落とされる。

「…真子ちゃん、口開けて。」

（だめっ♡ 奏さんの言うとおりにしたら、もっと気持ち良くされてしまう。）

真子は奏の言葉を無視して、必死に鼻で息をして、口を開かないようにした。

「……言うこと聞けないの？　まぁいいけど…」

奏は低い声でそう言って、片方の手を真子の顔に近づけてきた。そのまま大きな手で鼻を覆われる。

（…っ！　えっ？　これじゃ口を開けないと、息が…）

「こうしたら口、開けるでしょ…？」

「…ふぁっ♡」

酸素を求めて口を開くと、奏の舌がぬるりと入ってきた。

ちろちろ♡　ちゅむぅ♡　ちゅくちゅく♡　ぢゅぅ♡

息が苦しくて酸素を吸おうとすると同時に奏のキスを受け入れてしまうことになる。そうしたいわけじゃないのに、自分からキスを求めてしまっているみたいで、恥ずかしくて仕方がなかった。

（…っふぅ♡うぅっ♡息、苦しい♡あっ、でも奏さんの舌がぬるぬる動いて気持ちいい♡あっ♡そこ、上顎の方、チロチロ♡ってされたらもうわけがわからなくなりそうっ♡）

「〝んんん♡…ふぁっ♡　ジンッ…♡　ジンン〜〜〜〜♡」

ちゅぅ♡れろれろ♡れろっ♡ちゅむ♡

「…　ジンンンッッ♡♡…ンンッ♡…んっ♡…　ジン〜〜〜〜♡♡」

気持ちが良くて、でも流石に苦しくなってきて、真子が奏の胸を叩くと、奏は名残惜しそうに唇を離した。同時に真子の鼻を覆っていた手も離れる。

「っ♡…はぁっ♡…はぁっ…♡ はぁっ……♡」

真子はようやく解放されて、荒い呼吸を繰り返した。

「…そうさん、もぅっ、おかしくなっちゃうから…やめて…♡」

息が整うのも待たずにそれだけ口にした。しかし、奏は真子が必死に紡いだ言葉を聞いても、綺麗な顔で笑うだけだった。

「ダメだよ。俺がどんなに真子ちゃんのこと大事に思ってるか、真子ちゃんが

分かるまでやめてあげない。」

奏は今度は、真子の膝に手をかけると、太ももにとろぉ〜っ♡とオイルを垂らした。

そのままぬるぬるっとオイルを広げられながら太ももを撫で回される。

ぬるぬる〜♡ するっ♡ つぅ〜〜っ♡

「ぐぅう〜〜〜ッ♡ あぐっ♡ あんっ♡ だめぇ〜〜〜♡」

膝から太ももまで滑るように撫であげたかと思えば、フェザータッチに切り替えてそろ♡ そろ♡と指の先で軽く撫でられる。

「ひゃあっ♡ ああっ♡ ああ〜〜♡ オイルひろげちゃっ♡ やっ♡ そろそろっ

てするのもやだぁ～～～♡」

薄暗い中で、自分の足がオイルのせいでぬらぬらと光っているのが見えて、それがまた官能的な気分を煽る。

奏の指が確実に一番敏感なところに近づいてくると、期待するみたいにじわ…♡じわ…♡と蜜が溢れてた。

（私のあそこ、多分すごく濡れちゃってる♡…ああっ♡もうっ♡どんな触り方してるの♡）

ビクッビクッと身体が震えて、足がきゅっと丸まる。耐えられないって訴えるみたいに足枷の鎖がじゃらじゃらと鳴った。

奏は足の付け根までくると一度身体を起こした。そのまま真子の割れ目を指

で下着の上からなぞる。

「パンツまでびしょびしょだね。おまんこトロトロにしてて可愛い…」

くちゅっ♡ ちゅく♡

奏が真子の秘部を服の上から指で軽く触ると、卑猥な水音が響いた。誤魔化しようがないほどに濡れてしまっているのがわかる。

「ふっ♡ あぅ〜〜♡ そうさん、そこやだっ♡ ぐん〜〜〜♡」

（あっ♡ 軽く触られただけなのに、お腹の中まで熱くなっちゃう♡）

すり…♡ すり…♡ ちゅく…♡

「なにが嫌なの？こんなに濡らしてるくせに…」

「あっ♡まってっ♡見ないでっ…」

ずりっとショーツを下されて、敏感な蕾を剥き出しにされた。

「はぁ…、エッロ。クリ、てらてら光ってる。」

奏は吐息混じりの低い声でそう呟くと、指の先で、ぴんっとクリを弾いた。

「ひゃぁぁんんッ♡」

真子の背中が弓形にしなる。

「手錠かけられて足枷されて、無理矢理されてるのにこんな濡らして…真子ちゃん、案外、強引な方が好きなのかな。」

容赦無く言葉責めされて、恥ずかしいのに興奮してしまう。

ピンッ♡ ピンッ♡ ピンッ♡

奏は指の先で真子の蕾を何度も弾いた。

「〝あっ♡ んんっ♡ いじわっ♡ 〜〜〜ッ♡ はじかないでぇッ♡」

「ふふ、ごめんごめん。弾かれるだけじゃ足りないよね。ちゃんと気持ちよくしてあげるね。」

「ちがっ♡…んんっ♡　〝あっ♡　そうさんっ、そこに垂らさないでっ♡」

奏は温かいオイルをクリトリスに垂らした。

「ふふっ、オイルを垂らしただけなのにヒクヒクさせてやらしいな。」

ぬちゅ♡ くちゅ♡ ぬるりっ♡

奏はクリの周りに円を書くようにオイルを広げていく。焦らすみたいに中心には触らない。

「〝あ〜〜♡　〝もっ♡ そうさんっ♡ むり♡」

腰がグッグッ、グッグッと持ち上がってイク準備を始めるみたいに動いてしまう。

「まだ周りしか触ってないんだけど。またえっちなお汁が溢れてきてる。もう、オイルなのか愛液なのかわかんなくなってるね…」

くるくる♡ ぬちゅ♡ するる♡

「〜〜 ぅぅっ♡ んんん〜〜っ♡ ジンッ♡」

(ずっと周りばっかり弱く撫でられて…♡ ダメなのに触って欲しくなってくる…)

「そろそろここ、触って欲しくなってきた？」

奏は悪戯っぽい声で尋ねながら蕾の上に指を置いた。
それだけで、まだ指を動かされてもいないのにじゅわわっ♡と蜜が溢れた。

「真子ちゃんのクリトリス、オイルでぬるぬるにしごいてたくさん舐めて、それからナカにも指入れて、Gスボもポルチオもいっぱい触って、理性が飛ぶまで気持ちよくしてあげる。」

耳元で低く色っぽい声で囁かれて、真子はぎゅっと目を閉じた。

これ以上されたら取り返しがつかなる。そう思うのに、蜜が溢れ出るのが止まらない。

人気NO．1セラピストの技術で快楽を与え続けられた身体は、もう続きを求めて疼き始めていた。